
星海高等学校空想部

空我

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星海高等学校空想部

【Nコード】

N7290Z

【作者名】

空我

【あらすじ】

俺、浪城英治は、空想部とともにこの星海^{せいかい}高校を守っていく!!

001「勘弁してくれ」(前書き)

本格始動！俺！ということを読んでってください！

001「勘弁してくれ」

「勘弁してくれ」

今思えばこのセリフは間違っていたと思う。

だって俺は、少なからず今から始まるであろう生活に想像もつかないくらい、ワクワク、していたのだから。

上の下の高校生といえば俺の、浪城英治の説明として十分だろう。何が上の下かといえば、それは顔であり、頭脳であり、身体能力のことになってくる、いや、自分でこんなことを言うのは何だが、俺は運動神経、さっきと同じ言い方をすれば身体能力は、かなり良い。身体能力を除いてどこにでもいる奴、それが俺。

子供の頃は、特撮ヒーローなんか憧れて、夢はヒーローという普通の子供だった俺だが。これもまた普通に、それから離れていった。そして、市立の中学へと行き、受験勉強を終えて、自分のレベルに合った高校へと上がって、今は1年生の16歳だ。誕生日は七夕だから、今日、つまりは、12月後半のことなのだが、とにかく、今日の時点で16歳であっている。ここまでの人生を普通に、いや理想適にといっても当てはまるかもしれない、そんなふうに過ごしてきた俺だから、普通にあと2年間と少しこの高校で普通に過ごすと思っていた。

だけど、それは、俺の望んでいたことじゃない。

あの楽しい時間は、俺のココロがそんな時間を過ごしたいと思っていたからこそ実現したものなのだろう。

あの、空想部での時間は。

「部活、ですか」

「ああ！そのとおりだ！！」

「君がうちの部に入ってくれれば、全国大会も夢じゃない！」

このセリフは上から、俺、運動部の先輩（男）A、同じくBだ。先にも話してあるとおり、俺は運動神経はかなり良い、けど、時間を拘束されるのが嫌いな俺は中学でも帰宅部だった。まあ、入っても良いのだが休日をつぶされるのは、いやだ。休む日と書いて休日、字のごとく休んで過ごしたい。だから入部しない。けど運動部は俺の事情なんて知らない（話していない）から、誘ってくる。それも、毎日。本当に疲れる。

「…勘弁してくれよ」

そういつて俺は昼飯を食いに食堂へと足を動かす。当たり前だ、今は昼、弁当はなし、今いる場所は教室、購買も良いが学食は雰囲気暖かい。気分の問題だ。だから足を急がせる。歩く俺を引き止めるまでではないらしい、先輩は俺のいた教室に置いてけぼりだ。けどそんなことは知らない。ひとまず最優先事項は、飯、それだけだ。

案の定飯にありつけた俺は、特に誰とでもなく一人で食べ続ける。そんなときだった。ダン！と音がして俺の前に大量のハンバーガーが置かれたお盆がおかれた。そしてそれに続く声。

「空想部へ入らないか!？」

は？こいつは、何を言っているんだ？突如置かれたお盆の上のハンバーガーと、空想部という謎の部の存在に思考が停止しかけている俺に対して、そいつは続けて声を発する。

「おかしいな、君は、ほぼ毎日、時間通りに、ここへ来て昼食を食べているし、ハンバーガーのようなジャンクフードも食べるから、これで正解だと思ったんだがな、とにかく、空想部へ入らないか?」

「え?いや、その、…順を追って説明を頼む、まずこのハンバーガーは何だ?いや、それよりもお前は誰だ?空想部って何だ?」

ひとまずは説明を聞くために、そいつの顔を見る。声でわかっただけだが、やっぱり女子だ、綺麗な短い黒髪の子、かなりかわいい。

「ん?あ、そうだな、説明だな、まず私は泉ヶ関万理、万の理で万

理だ。このハンバーガーは、私が見える範囲で、なおかつ、君をし
ばらく観察した上で、君のつられそうなものを買った。これと引き
換えに部に入ってもらおうという魂胆だ。そして空想部だが、…どん
な部なのかはいえない。ただ、絶対に楽しいとだけ伝えておこう」
ああ、わかった。そういうことか、なるほどなるほど。

「お前、多分だけど、馬鹿なんじゃないのか？」

俺の一言に、こいつ、…泉ヶ関は、劇画みたいな驚愕の表情にな
った。面白いな、こいつ。

「な、なぜ馬鹿だと思うんだ？」

声、震えてるぞ。大丈夫かな、こいつ。

「いや、まずこの量のハンバーガーで部活に入ろうって気になる奴
ないねえよ」

「少なかつたか？」

「いや、逆だよ、この量のハンバーガーは見てるだけでキモイし、
あと、それに、…ん？」

あれ？おれ、なんかすげえ事見逃してる気がする。なんだ？

「なあ、泉ヶ関、俺に対しての説明もう一回言ってくれないか？」

もう一回聞けば分かると思うしな。

「説明か、お安い御用だ、では行くぞ。まず私は泉ヶ関万理、万の
理で万理だ。このハンバーガーは、私が見える範囲で、なおかつ、
君をしばらく観察した上で、君のつられそうなものを買った。」

「ああ、もうだいたいじょうぶだ、わかった」

「これか、この気持ち悪い感じの正体。」

「おまえ、俺のことストーリーキングしてたな？」

だってそうだ、こいつ俺のことしばらく観察って言ったぞ。俺は
そこまでジャンクフード食うほうじゃないし、最後に食ったのは、
1週間ぐらい前になる。つまり。

「ああ！2週間前から君の事をストーリーキングしていた！もう私は君
の家まで知ってるし、君がどんなことを誰としたのか、どんなエロ
本を読んだかまで分かっている！だから！さあ！空想部に入るんだ

！」

「…最悪だ、俺はこんな重大な告白を、とつてもいい笑顔でしてしまおう美少女、もといストーカー、に捕まったのか、本当に。」

「勘弁してくれ」

本当にココロの底から、切実に。

001「勸弁してくれ」(後書き)

どうでしたか？読みにくかったらどうぞ言ってください。かんそうをおねがいします！！

002「君が好きなんだ」(前書き)

第二話です、どうぞ読んでください。

002「君が好きなんだ」

「君が好きなんだ」

これは、可愛い子から言われたら、嬉しいものとはかり思っていた。いや少し男っぽ過ぎるか？

とにかく、このセリフを生まれて始めて言われたのは、1週間前、学食を食べているときに、空想部という謎の部活に誘われ、好きなものから、読んだエロ本まで知られていると知った5秒後だった。

それからというものの、空想部、泉ヶ関万理からの勧誘は回数を増していった。朝起きて、携帯を確認すると、メールが50件、すべてがあいつからのメール、内容は同じ。

「空想部に入れ、私と付き合え」

細かい部分は違えど、内容はほぼこれだ。空想部に入れというのは分かるが、付き合えとは何事か。はつきりいつて気持ち悪い、オブラートに包んで感想を述べたとしても、気持ち悪い。問題はその後だ、ストーリーカーをしていたことを、分かったはいたが、登校途中に、まったく持って同じタイミングで話しかけてくる。

「奇遇だな、これは何かの運命だな、やはり君への愛の重さの違いか、私は君のことが好きだからな、最初は部活に誘うためにストーキングしていたが、やはり君に恋をしてみましたようだ、だから私と空想部でラブラブいちゃいちゃしよう。さあ、部活に入るんだ！」

もう何がなんだか、なぜここだけ一言一句同じセリフなんだよ、1週間。まあ、案の定部活の勧誘を断るのは慣れていたし、告白されたのは初めてだが、こんな告白じゃ、ドキドキなんかしやしない。だから俺はこのあとも断り続けて、こいつとはまったく別の人生を歩むのだと思っていた。

そう。あのときまでは。

俺は、正直疲れていた、毎日のストーキング、勧誘、告白、すべての原因はあいつだ。そんなに疲れていたから、大事な、大事な、提出日が明日までの、大事な課題を教室に忘れてしまったんだ。

それに気付いたのは家に帰ってからのことだ、もう冬だから、外は暗くなっている、俺は徒歩での登校なので、急いで、もう部活をする者もない、学校へと向かった。

俺の机の中に課題はあった、イライラしながらも、それを回収した俺は足早に教室から出た、いや、もつと正確に伝えるべきだろう、俺は足早に教室から出ようとした、しかし、それはできなかった、なぜなら、教室の扉のほうを向いた俺の目の前に、真黒い影でできたような、狗が此方をにらんでいた、狗という字のごとく、マルチーズのような小さなのではなく、かなりでかめの狗、そんな狗がにらんでいたんだ。

え？こいつはなに？明らかに、この世のものとは思えない。オーラを纏っている、アニメで見るようなオーラを。それもまたこれも真黒いオーラを。

「うわあああああ！！」

俺は無様に声を上げ逃げ出した。無我夢中で狗の横をすり抜け、廊下を必死に駆けていく、後ろから狗の走る音が聞こえる。いつくら運動神経がよくても、狗には追いつけないスピードではなかったのだろう。思いきり噛み付かれる、左足を。

悲鳴、恐怖と苦痛にゆがむ悲鳴、どんなことをしたのかは分からない、ただ必死に狗を振り払おうとする。激痛、それに次ぐ激痛、ほんとに死ぬかもしれない、そう思ったときだった。

瞬間、痛みが少し引くとともに、狗が離れる感覚がした、何が起きているのか脳が追いつくまでに時間がかかった。しかし、すぐに冷静に、狗がいたほうを見る、そこにいたのは、女子生徒、それと、少し距離を置いたところに狗、女子生徒が誰かは、なんとなく予想がついていた。

「大丈夫か？」

もうすっかり聞きなれてしまった声、そこにいたのは、やっぱりか、でもなぜだ？

「なんでここにいるんだよ、泉ヶ関」

そう、そこにいたのは、俺をストーキングしていた奴、泉ヶ関万理だった。

「万理で良い、どうせ夫婦になるんだからな、」

夫婦って飛躍しすぎだろ、こっちはお前のこと、気持ち悪がってるのに。

「何でお前は、質問に答えないんだよ」

前も、そうだった。

「ああそうだな、前もそうだったな、そんなのは決まっている」

そしていつもの笑顔でこいつは言った。

「君が好きなんだ」

002「君が好きなんだ」（後書き）

どうでしたか？まだこの程度ですが、がんばっていききたいと思いま
す。

かんそうおねがいます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7290z/>

星海高等学校空想部

2011年12月25日01時45分発行